

ミルトン・H・エリクソンとハイパー経験論の基礎

澤野雅樹

一 観察優位の起源

二〇世紀が幕を開けた一九〇一年のこと、一〇〇年を越えた今もなお謎めいたところの多い一人の臨床家が誕生した。本稿はその謎の一端を探ることに充てられるが、その人物こそミルトン・H・エリクソンである。

前年、すなわち一九世紀最後の年には深層心理学の幕開けを告げるジクムント・フロイトの名著、『夢判断』が発表されていた。歴史的な符合の観点からすれば、ジャック・ラカンがその翌年、つまりエリクソンと同じ一九〇一年に誕生しているに何か暗示的なものを感じる人が少なくないかもしれない。

たまさかの符合に取ってつけたような意味を探そうとする姿勢は、もちろん合理的とはいえない。無関係な出来事が時を同じくして発生することや、または相前後して起こるなど珍しい出来事ではないし、それだけでは何ら意味をなさない。にもかかわらずそれらのあいだに神秘的な連関を認め、あれこれ意味を勘ぐれば、むしろ神秘主義との誹りを招きかねない。しかしながら、フロイトの高弟でありながら後に離反するカール・グスタフ・ユングならば、頭ごなしの非難くらい先刻承知の上だとしてもうそぶいたかもしれない。彼が晩年、わざわざ「シ

シンクロニシティ」という仰々しい名前をつけてまで偶然の一致に着目し、その意味を探索したのは、因果関係を結ぶことのない独立した諸項の符合には、なるほどそれとわかる合理的な意味は見出せそうにないが、かといって何の意味もないと無造作に切り捨てられず、結局のところ一致それ自体から立ちのぼる微かな意味の匂いをおろそかにしないということしかできなかったからである。⁽¹⁾

一九〇〇年にフロイトが『夢判断』を出し、翌一年にラカンが生まれたことに何かを感じ、「不思議なことがあるものだ」と小声でつぶやく声があれば、その声のうちに宿る意味は、その意味をつかんだ者にとつて、とりあえずシンクロニシティから放たれる何かである、——それが何を指すのかは皆目わからないにしても——。

一九〇一年をめぐる符合の意味を包囲し、その輪郭をつかまえようとすれば、たぶん同年七月七日に円谷英二とヴィットリア・デ・シーカの二人が生を受けていることの方がはるかに暗示的かもしれない。同じ日に生まれた者がそろって映画人になったとはいえ、かたや『ゴジラ』や『ウルトラマン』の誕生に深く関与し、かたや『自転車泥棒』や『終着駅』、『ひまわり』などを世に問うたが、二つの傑出した才能をどう比較すべきか皆目わからないが、ともかくも極端なまでの対照性があることにだけ注意を払っておこう。むしろ、私は映画史を論じたいのではなく、同じ日付をもつ二人の映画人の無・関係性に近い対照性を、これまた単に同年に生まれたにすぎない別の二人に投げかけてみたいだけのことである。実際、円谷とデ・シーカがその後たどることになる生の軌跡の近さと遠さを前にすれば、『夢判断』の翌年にラカンが誕生したことよりも、エリクソンがラカンと同じ年に生まれてきたことの方に見過ごせない意味があるとは感じられないだろうか。かたや精神分析の理論を極度に高度化し先鋭化したフランス人であり、かたや短時間の面接で次々と患者を治すことで「魔法使い」と呼ばれな

がら、理論はおろか技法の体系化をも拒み、さらには既存の病名すらほとんど用いなかったアメリカ人である。一方のフランス人は精神分析が発見した無意識を土台にして秘教的ともいえる理論体系を築いて、精神分析の全体をマントラめいた難解な教義に築きあげるだろう。他方のアメリカ人はフロイトが治療効果を真つ向から否定した催眠にのめり込み、ジャン＝マルタン・シャルコーのそれとは似て非なる技法へと刷新することに成功するが、その際にも一般的な手法など作らなかったし、誰にでも簡単に唱えられる導入マニユアルのたぐいを決して作ろうとしなかった。ラカンの名が体系化の極北にあるとすれば、エリクソンの名は体系的なものの一切の断固たる拒否という点で、さしずめ反対極の末端にあるかもしれない。もちろん、エリクソンの拒否が単に反抗的な態度にすぎず、なんら中身をともしないものなら偶発的な符合の意味は空疎きわまりなく、そこでピリオドとなる。しかし、断言してもいい、中身の有無については懸念するにはおよばない、と。

調査や実験を重視する科学者のなかには、理論派を煙たがり、毛嫌ひする人も珍しくない。しかし、エリクソンの場合は単に好き嫌いといった趣向の問題ではなかったようだ。彼の場合にむしろ顕著なのは、予断を排そうとする断固たる姿勢にある。どんなに尤もらしい知識であっても、いや、そうであればこそ、いったんは何もかも遠ざけられなければならない。さもないと、先入観に囚われるあまり、事物の表面から得られたかもしれない決定的な知見を見逃しかねないからである。そして、予断という色眼鏡さえなければ彼には決定的な事実を見逃さないという自負があったし、その自負を裏付けるだけの経験もたつぷり蓄積されていた。

エリクソンの基本姿勢は、どうやら生来の傾向に近い何かが関わっていた。何かとは経験だが、生来の経験は語義矛盾であり、ありえない。エリクソンは生涯の早い時期にポリオの発症を二度にわたって経験し、いずれも

生死の境をさまよった。一度は幼児期であり、二度目は青年期である。先に「生来に近い」と言ったのは、生まれつきとも言えるほど人生の早期に味わった経験とその後遺症が、後の人生に決定的な影響を及ぼしたからである。彼は物心がつくよりも早く、ポリオによる全身の重篤な麻痺のためベッドに釘付けにされた。そのため自分よりも後に生まれた赤ん坊がすくすく成長してゆくさまを、かたわらのベッドからただ眺めているしかなかった。弟や妹がハイハイを始め、つかまり立ちをし、やがて直立歩行に到達するまでのプロセスを指をくわえて——あるいは指をくわえることすらできずに——見つめていたのだ。彼は後年、セミナーに訪れた臨床家たちを前に言うだろう、——あなたがたは自分がどうやって立ちあがり、歩きはじめたのか知らないだろうが、私は知っている、なぜなら、この目ですべてを見ていたし、今でもつぶさに思い出すことができるからだ。そして、こう続けるのだった、「まず、手を上に伸ばして自分の身体を引き上げました。そして両手に重みをかけ、たまたま足に体重をかけることを発見しました。それは実に複雑なことでした。というのも膝はじきに崩れてしまうからです。膝をまっすぐにすればお尻が崩れてしまします。そして両足を交差させます。すると膝もお尻も崩れてしまい、立つことができません。両足は交差され、まもなく何かにつかまることを学びます。そして自分自身を引き上げ、どうやって膝をまっすぐに保つかを学び、それができるようになると、今度は注意して同時ににお尻をまっすぐに保つことを学ばなければなりません。やつと注意してお尻と膝を同時にまっすぐに保ちながら、両足を広げることを学んだのがわかります。さあついに両手を支えられながら、足を広げて立つことができました」⁽²⁾。エリクソンは、他の人たちのように自然に立ちあがったから記憶がないのではなく、立つことはおろか動くことすらままならず、ただ凝視しつづけるしかなかったがゆえに、幼児の身体が重力に抗ってようやく全身を支え、立位で持

ちこたえるために複雑なメカニズムを稼働させる様子について知的に理解することができた。彼は脚の筋肉を動かさない代わりに目で筋肉の動きや震えを知覚し、脳で関節の用い方を反芻し、腰の力の入れ方を理解し、不連続な断片的イメージを一連の連続的なプロセスとして組み立てながら記憶したのであり、その事実セミナーにおいて聴衆たちの耳にポリオゆえの優位性を強く印象づけたことだろう。

もちろん、優位性とは言ったものの、その語を深読みするにはおよばない。エリクソンの優位性は、障害それ自体に何か特別な利点があるということではなく、しばしば経済で言われる「トレードオフ」のように、他の人々が享受する自由を奪われたのと引き換えにして、彼らには獲得し得ない宝を手にするチャンスを得たと言いたいだけのことである。チャンスとは、観察の腕を磨き、洞察力を育む機会のことだ。それゆえ彼はインタビューで次のように呟くことになる、「それは障害なんですか、それとも財産？」⁽³⁾。

この興味深い発言は、二度目のポリオの経験について、ひとしきり語られた直後に現われる。幼児期とは異なる細菌に侵され、麻痺を発症後、その後の人生は寝たきりで過ごすしかあるまいと思われていたエリクソンは、ささやかなゲームを契機に飛躍的な回復を遂げてゆく。幼少期のポリオについて述べられた談話は多いが青年期のものは滅多にないので、その興味深い経験談を引いておこう。

ポリオのために、身体感覚のほとんど全てがなくなりました。脚がどこにあるのかわからない。それで看護婦さんが、私の顔にタオルをかぶせて、それからこんなふう⁽⁴⁾に私の腕を置くんです。それで私は私の腕がどこにあるのかを探さなくちゃいけない。それが私の課題だったのです。ここなのか、ここなのか、ここなのか、わからない。全然見

当もつかないんです。その後、身体感覚が回復していく中で、手首や手や肩の場所がわかるようになる前に、まず肘の位置がわかるようになってきたんですね。空中に浮かんでいるこれは、他の身体の部分との位置関係からすると肘なんだろうなっていう感じで。太股の場所はわかるんだけど、脚がどこにあるのかわからない。脚の位置がわかってきても、くるぶしから下がわからない。足の親指や小指はわかって、それが同じ足にあるということとはわかってきても、その関係がわからない。こういうふうに、親指と他の指があるでしょ？　こここのところに親指が浮かんでいて、ここに浮かんでいるのが小指ですよ。でも普通だったらわかるそんな関連さえわからないんです。それで本当にたくさんの時間を費やして、朝も昼も夜も、一つひとつ順番に、ゆっくりと身体の配置の感覚を作り上げていったわけです。そうして麻痺から回復し始めるにつれて、今度はどうやってこの爪先を動かすのか、するとどんなふうに感じるのか、そして脚を動かすときに肩はその筋緊張のゆえに何をしなくちゃいけないのかって。これは覚えておいたほうがいいと思うけど、膝を伸ばすと、両手や両腕にも緊張が入るんだけど、みんな膝関節のことしか見てないよね。⁽⁴⁾

まず驚かされるのは、引用文に登場した看護婦が実に鮮やかな一手を放ったことだろう。彼女の機知に富んだ処方が青年エリクソンの復活に際して果たした役割は小さくない。用いられた小道具はタオルだけである。「なんだ？」や「どこにあるかな？」といった、クイズ形式の間答が始まった。それは言葉への反応、目による知覚、脳による認識という三セットだけで船出してゆく旅路だった。見えないものの位置を探り当て、見えるが感じない何かがそこにあると知覚し、その知覚された無感覚な部位が自分の四肢であることを認識し、それらすべてを記憶することから、おのが身体を再発見し、再構築してゆく旅路である。

麻痺は単に感覚がなくなるのではなく、かつて自分自身であつたものを失う経験でもあつた。それまで感覚を通して自身の所有感をも得ていたとすれば、麻痺は自己の一部ないし大部分を喪失した経験を意味する。ひるがえつて感覚を取り戻すことは、自分ではなくなつたものを無感覚の世界から奪還することであり、運動感覚を取り戻すことは失われた自由を回復することでもあつた。消えた部位を発見しては、残つた部位に貼り付け、諸断片が連続した一個の器官であるよう感覚の糸で縫合し、認識のボルトで締め、そうしながら身体をゼロから組み立て直す作業、——そうした作業の果てに、ようやく自分自身の住まいを見いだし、自己の中に住まう安らぎを味わうことができたのである。リハビリテーション、つまり再び住まうことは、住まいとしての自己を再発見しつつ再構築してゆくことなのである。

そして、見ること、見いだすこと、再発見すること、つまり、ひたすら観察し、目にみえる事実から洞察を得ることがエリクソンの基本姿勢となつてゆく。臨床はもちろん、研究や人生においても——。

もちろん、事実を感じとるには認識の側にその受け皿がなければならぬと主張する人々もいる。しかし、エリクソンの教訓は、言語を通してその受け皿が脳にインプットされるより前に得られたものだ。さらに言えば、ようやく手にした受け皿でさえも青年期の発病によつて粉碎されてしまった。彼は身体というシステムを二度も喪失し、身体の地図を超人的な努力で二度も書き上げたのである。もしも認識の枠組みというものがあるとしても、それは彼が経験から独自に積み上げ、築いたものであり、それ以外の何ものでもなかった。

ちなみにエリクソンが初めて言葉を発したのは四歳を過ぎたころのことであり、その空前絶後の遅れは、ほかにはルートウイヒ・ウイトゲンシュタインくらいしか思い当たらない——言語に関する空前絶後の研究者が二人

とはじめて言葉を発したのがきわめて遅かったことにも、なにか因縁めいた意味がありそうだし、二人の特異な言語観を並べて考えるべき点も少なくないが、その符合については別の機会に譲るとしよう。後年になってもエリクソンの立場（ないし信念）が変わらなかつたのは、既成の理論や枠組みをしりぞけなければ、それらが邪魔をしてもちまへの観察眼が曇らされてしまうと考えていたからだろう。観察のコツを会得し、力を蓄えてきた者にとって、既存の枠組みを不用意に信じることは、かえってその力を削ぐ障害になりかねない。エリクソンは認識をその受け皿なしに直接獲得しようとしていたし、なまの事実がそのままにあることを強く信じていた。大事な点は、単に情報が無数にあることではなく、そのなかから最も核心的な情報を素早く、確実に選り分けることにあった。にもかかわらず、多くの人は予断に邪魔されたり、先入観ゆえに眼前の現実から目をそむけたりして、肝心の事実（情報）をほとんどつかみ出すことができていなかった。まるで見えているものを見ないでいるために既存の認識の枠組みにしがみついているようなものだ。たぶんエリクソンの目には、ほとんどの臨床家はまともに観察すらできていないし、観察の仕方を学んでこないに等しかったのである。

理論的な枠組みを現実に当てはめる態度は、ふつう、演繹主義的とか実在論的と形容される。それに対し、その手の既存の知識を予断と見做し、それらを排して現実をとらえようとする態度は、一般に経験論的とか帰納的と言われるか、ときには悪意を込めて素朴実在論とも揶揄される。エリクソンは哲学的な議論にはほとんど与しないから、わけ知り顔の人から素朴実在論と厭味を言われても一向に動じなかつたろう。そもそも思考や人格を傾向別に分類し、レッテルを貼るような連中は、そうする行為が同時に力を振るっていることに考えがおよばない。エリクソンは自分の観察力が一つの力であることに自覚的だった——自覚的であるがゆえに遺憾なく利用す

る人でもあったのだが――。ウィリアム・ハドソン・オハンロンはこんな例を挙げている、「エリクソンのもとで研修医をしていたある内科医がヘイリーに語ったところによると、ある日エリクソンとその内科医の妻が、病院の広場で出くわしたそうである。挨拶を交わした後、エリクソンは、あなた妊娠していますね、と言った。そういうわれて彼女はびっくりした。というのも、たつた今、産婦人科に行つて妊娠を告げられてきたばかりであつたからである。前頭部分に変色（肝斑 chloasma、と呼ばれるもの）が認められるとエリクソンは彼女に告げた⁽⁵⁾。別のところでエリクソンは、性は男性にとつては局所的な問題でしかないが、女性にとつては全身の問題であり、全体的な変化をもたらすと述べている。全体とはいへ、それは局所的でないという意味ではなく、「肝斑」を含め、無数に局所的な変化が生じ、それらが女性の身体に全体的な変化をもたらすのである。しかも、その変化はよく観察しさえすればすぐにわかることだという。セミナーにおけるエリクソンの語りに触れてみよう。

女性が積極的な性生活を始めると、最初に内分泌器系に変化が起こります。骨のカルシウムが変化します。額の生え際がごくわずかに変化しがちです。眉毛は生え際がほんの少し目立ってきます。鼻はたぶん、長さにして一ミリメートルかあるいはそれにも満たないくらいですが長くなります。唇はほんの少し膨らみます。あごの角度が変化します。あごの先がほんの少し重くなります。胸と尻の脂肪分がもっと多くなるか、しまるかのどちらかになり、そのため身体の重心が変わります。

結果的に、女性は身体の姿勢が前と変わります。さらに歩き方も変わります。歩くときの腕の振り方や身体の姿勢などはまったくいうほど変わってしまうのです。そして、見方を変えれば、ほとんどすぐにそれらの変化がわかり

ます。なぜなら、生物学的に女性の身体がそうなるようになっていくからです。皆さんは妊娠が進むようすを見ると、どのように身体が大きくなるかわかります。身体は妊娠期間中も、授乳期間中も、ずっと変化します。⁽⁶⁾

この調子で、エリクソンはある日、病院に出勤した際、隣室から漏れ聞こえるタイプライターの打鍵音を耳にすると秘書室のドアを開け、「旦那さんが昨夜、出張から帰ってきたんだね」と告げたそうだ。その言葉がどれほど秘書を驚愕させたかはわかりかねるが、少なくとも秘書を驚かすだけでは終わらなかった。彼女はきつと昼休みに、同僚との茶飲み話にその話題をもちだすだろう。その話を聞いた同僚もまた、やや誇張しながら同じことを繰り返すだろう。間もなくエリクソンの並はずれた観察力が院内のあちこちでうわさになり、途方もないイメージが勝手に生長していく。そのことを見越して彼は自分の力を一種の特別な神話生成力としても運用していた。おそらく、彼の發揮した力には権力に通じるものがあつたかもしれない。たぶんそれはエリクソンが思いどおりに仕事をするための条件ないし基盤としての権力であつて、病院の経営権のような地位や支配力に直結した権力などではなかった。むしろ、いかなる地位や名誉とも無関係な次元で勝手に浸透してゆく力であつて、たとえば彼と視線を交わし、その言葉に接した者たちが「エリクソン先生には私たちの心の中がお見通しなのかもしれない」と感じ、不安と畏れをもって接するようになり、ひいては「誰にも先生はあざむけない」と信じさせるような力である。

詳細は後述するが、エリクソンは彼が勤務する病院スタッフすべてに尋常ではないその力を浸透させることにより、当時はもちろん、今なおにわか信じがたい作戦を次々と立て、院長の許可を取るのももちろん病院のス

タッフを片っ端から巻きこんで大々的な治療実践を行なうことができた。エリクソンの後継者の多くが奇想天外な作戦の例を本や論文で味わい、笑い転げ、次いで自分が同様の作戦を立てて実行する場面を想定してみると、「いや、とてもじゃないが、こんなことはできるはずがない」と感じてしまう。エリクソンの弟子たちのみならず、彼の娘でさえ、現代社会ではとても実現不可能であると述べる（もしくは、こぼす）くらいである。けれども、ならばエリクソンが勤務医だった時代のアメリカは今よりもずっとおおらかで、どんな大胆な提案でも笑って受け入れてくれたのかといえば、当時のアメリカを知る者の誰ひとりとして肯んじえないだろう。ある一面だけをとりあげれば現代よりも鷹揚なところがあったかもしれないが、一般論としてそう言うことはできない。エリクソンが勤務医の時代に実施した処方を思い浮かべて、「現代ではとても不可能だ」とあきらめる当代のセラピストは、おそらくポリテイカル・コレクトネスやらインフォームド・コンセントなど次々にあらわれる今風の規準や約束事が障壁となつて、いかにもエリクソン流の自由奔放な作戦は時代にそぐわないと考えてしまったのだろう。たとえ同様の作戦を立てたとしても管理者から許可が下りるはずがないし、もしも無許可で実施したら社会問題となり、せつかくのぼりつめた地位から転落しかねない、と。だが、冷静になつて、よく考えてみよう。彼らは自分たちができないことを時代の制約のせいにしたがるが、ならばエリクソンが勤務医だった一九二〇～四〇年代のアメリカでは、非常識で素つ頓狂な治療法がいくらでも可能だったのだろうか。思いつきさえしたら、どんなに粗暴な処置であつても即座に実施できたであろうか？ 私たちがロボロミー手術や断種手術を想起すると予想されたとしたら、それは大間違いだ——いずれも今や乱暴な処置と思われているが、当時もそう思われていたわけではないからだ。ミシエル・フーコーによれば、一八世紀の医療にはメランコリー（憂鬱）を遠心力で

分離しようと、病人を《回転機械》に固定し、猛烈な速度で回転させる治療法が行なわれており、今にしてみればどっちが狂っているのかわからないくらいだが、当時はそれすら正気の沙汰だった。⁽⁸⁾エリクソンが発案し、実行に移した作戦のなかには、それら狂気と見紛う正気の沙汰を凌駕する事例も少なくなかった。利用できるものなら何でも利用する方針だったから、事情を知らなければ甚だしい人権侵害や単なる破壊行為と思われるもののないものも多々あった。扱いにくく粗暴さで存在感をアピールする問題患者がいれば、その粗暴さの鏡像を見せつけるべく、患者の目にうつる暴力をその量と質の両面で圧倒すべく院内を暴れまわり、心配になった患者が「もうやめませんか」と言っても、「まだまだ。もっとやるよ」と言って破壊を続ける……。治療目的とはいえ、施設の破壊をとまなう作戦が当時の道徳や常識におとなしく収まるはずがない。むしろ、その時代の常識から大きく逸脱していたからこそ今もって甚だしく非常識であり、それゆえ現代の読者が度肝を抜かれるのと同様に、当時代の患者も呆気にとられ、心配になり、恐怖を感じるほどだったからこそ大いに効き目があったのである。実施され、めざましい効果をあげた以上、かろうじて実現が可能だったことにはなるが、しかしエリクソンの成例を耳にした別の医師たちが競うようにして破天荒な作戦を繰り出し、アメリカ全土に広めたという話は残念ながら漏れ聞こえてこない。それゆえ、当時も現代と同様に誰もが不可能だと考え、実行に移すことなど思いもおよばない突飛な戦略が立てられ、どれもが一回限りの特異な事件として実施されたにすぎないのである。

エリクソンの予想だにしない処方や意図的な暴言の数々、そして大胆極まりない実践の事例を次々に見せつけられると、私たちはそれらの凄まじさに憧れを抱く一方で、自分の小心さに恥ずかしさを覚えさせられる。ハイリターンを夢見て大きなリスクを取りに行くには、私たちにはまだ自我の残滓が濃厚にありすぎるのだろう。か

と言つて、リスクを恐れるあまり、同じ場所で延々と足踏みをつづけ、ひとつ所に安住してもいられない。ならば、どうすればよいのか、——リターンの大きさと帰結の蓋然性がともに増す方向に鍛練してゆくほかにない。

とはいえ、よくよく考えてみれば、エリクソンは観察にとつて障害になる予断をことごとく斥けたのと同じく、脳裏に浮かんできた最適な戦略を実践に移すに際して障害になるものをことごとく排していたにすぎない。教条主義的な理論が患者のもてる可能性への気づきを妨げるのと同様、ある作戦はキリスト教道徳に反し、ある処方 は性道徳に反し、ある行動は尋常な大人の行動様式をいちじるしく逸脱するかもしれない。ならば、それら をみな取つ払つてしまえばよい。ある力を振るつて確実によるこびが増えるとかわかつていながら、その力の発露を阻止し、力を振るうのを禁じる別の力が控えているならば、排さなければならぬのは力を封じる力の方であらう。それゆえ、エリクソンは精神医学であれ、臨床心理学であれ、彼の治療実践を曇らせる一切をその見立てから斥けたのと同じく、彼の処方や実践を妨げる道徳や倫理の規準すべてを黙殺し、文句を言いそうな権力や權威は巧みに手なずけ、あらゆる障害を乗り越えて実践するのに躊躇いがなかった。その意味では、彼の処方 は融通無碍であり、無限に多様だったが、それらを繰り出す彼の姿勢そのものは終始一貫して戦略的であり、一つの処方の裏地にはいくつもの戦術が縫いつけられているのが常であつた。

二 関係の構造化とその多重性

そろそろ実例が必要かもしれない。ものごとの本質を見抜く眼力と迅速かつ的確な行動力の一例として、シド

ニー・ローゼンが「くしゃみ」と題した事例を引いてみたい。

ある女性が私に言いました。「私は診察のため、今まで二六人の医者に会いました。ある医者は、検査のために私を二週間、病院に入院させました。別の医者は一週間、私を入院させて検査をしました。最後に彼らは私に言いました。「あなたは精神科医に診てもらった方がよいでしょう。あなたは診察を受けるのに、ご機嫌ですね」

その女性は私にその話をしました。私は彼女に尋ねました。「あなたはそれぞれの診察で、医者 の検査を邪魔するような何か変なことをしたのですか?」。彼女はしばらく考えてから答えました。「そうですね、彼らが私の右の胸を調べ始めると、私はいつもくしゃみをしました」

私は言いました。「あなたは四八歳で、彼らがあなたの右胸を触ると、いつもくしゃみをします。あなたは医者たちに、若いときに淋病と梅毒の既往があることを話しました。そして、あなたは右胸に触られるとくしゃみをし、それが胸の検査をいつも邪魔しているのですね」

彼女は言いました。「そのとおりです」

私は言いました。「さて、私はあなたをある婦人科医に紹介しましょう。私が電話で彼に言うことを聞いてもいいですよ」

私はその婦人科医に電話をかけて言いました。「私のオフィスに四八歳のご婦人がいます。彼女の右胸にはしこりがあると思います。それが良性のものか悪性のものか私にはわかりません。ある心理学的な徴候があります。そこで、私はそのご婦人をあなたのオフィスに紹介しようと思うので、彼女の右胸の徹底的な検査をお願いします。そして、

もし何か悪いものがあつたら、あなたの診察室から直接彼女を病院に送ってください。そうでなければ、彼女は逃げ出してしまふでしょう。

そして、彼は彼女の右胸を検査しました。彼はすぐに彼女を病院に連れていきました。彼女は胸の悪性腫瘍のため、手術を受けました。⁽⁹⁾

まず、この患者がいくつもの病院で、数十人もの医師たちのあいだをたらい回しにされてきた点に注目しよう。多くの病院を訪ねながら一度としてまともに診察してもらっていないにもかかわらず、なぜか彼女が「ご機嫌」だった理由は、エリクソンが適切に行動したことにより我々の目にも明らかになった。彼女は、同じ手段で二六名にのぼる医師たちを毘にかけ、診察や治療を阻んだことで勝ち誇っていたのだ。医師たちはままと彼女のパートナーに巻きこまれ、いいように弄ばれてしまった。どうにも扱いにくい患者の連戦連勝が今後もつづき、図らずも医療者が彼女の「ご機嫌」を取りつづければ、医療行為が麻痺するだけでなく、彼女の人生も本ものの窮地に陥ることになる。実はそのことこそ彼女が直面するのをもつとも恐れていたことであり、かつ早急に見破られなければならない真実だった。

第二のポイントは、事後的にみれば呆気ないことだが、これ見よがしの毘が含意するいくつかの素地にある。彼女は大半の医師や心理学者がどんな種類のエサをぶら下げれば簡単に飛びつくかを知っていた。どうして知ったのかはわからない。直感的にわかったのかもしれないし、診察を受けるうちに経験的に会得したのかもしれない。はたまたフロイトの著書か、もしくは精神分析の入門書でもひもといていたのかもしれない。真相はわから

ない。しかし、性的な異常や性規範からの逸脱をにおわせれば、たいていの「先生」は簡単に引つかかると読んでいた。そうした経験則を餌として利用し、医師の注意を巧みにそらした結果、彼女は自分に必要な検査を受けられずじまいになった。医師たちはいえ、さんざん彼女に振り回され、翻弄された挙げ句に、取り扱い困難のラベルを貼ってエリクソンのもとに送り込んだというわけだ。

ところで、彼女の仕掛けた罠はどうして見破りにくかったのだろうか？ 三〇人近い医師たちが一患者にまんまと籠絡されたのだ。エリクソンをのぞく医師のすべてが単純な手に引っかけ、ついで化けの皮をはげなかった。どうして？

原則として、信用は猜疑心にまさる。猜疑心が信用を凌駕し、あらゆる人に疑念を抱きはじめると、おそらく人は外出すらできなくなる。だから、人は社会活動をし、他者と関係するために大半の人を信用する。その種の信用はおそらく最低限度の社会性を意味するだろうが、そのレベルの信の秩序すら崩壊し、秩序としての他者が信じられなくなると、人は誰と接する際にも鉄格子と防弾ガラスを必要とするようになる。そうならなくとも、周囲のすべてに猜疑心を向けたら、誰でも正気を保てなくなるから、人は平常心でいるためにも人を信じ、他者に同調しようとする。その種の同調傾向は社会的な傾向でもあるが、同時に個人的な反射でもあり、さらには生理的な機能でもある。ひとは親密さを増し、より接近するために同調することもあるが、一定の距離感を維持し、より近づくこともなければ、より遠ざかることもないように同調することもある。肯定の返事は、相手を肯定し、接近の姿勢をあからさまに示す場合もあるが、その一方で場の空気の流れを乱さず、人の声を風を受け流すように軽く、ほとんど息を吐くように頷く場合もある。風のような日常に波風を立てまいとする微弱な同調でさえ、

社会的な意識をもつてそうするのだが、その意識は純粹に社会的な次元にのみ出現するものではなく、生理的な次元の同調に根差しているのかもしれない。たとえば、ルームシェアリングをする女性たちの月経の周期が図らずも同期することがあるのは、生理的な同調がはたらいっているのかもしれないし、または共同生活に必須の社会的な同調傾向が一因となって、意識下ではたらく生理的な機能まで同期させていたのかもしれない。

人は環境の諸要素から情報を汲み取り、それらとの位置関係から自分のポジションを定める。静止しているように見えても、人は絶えず知覚された距離の一定性を確認し、なかば自動的に再認するものだ。だから、環境の側が不意に変動すると、人や物との位置関係を含意する距離の保存則にも動揺を来し、なんとなく落ち着かない気分を覚えたり、漠とした不安を感じたりして、正体不明の恐怖感におそわれることがある。位置関係や距離の秩序を脅かす動揺が生じると、その強度に相関的な意識や感情の変動が生じ、それも無数のヴァリエーションをともなうて生起するだろう。環境の変化が人の不安を煽れば、その感情を解消するために人と人との距離は急速に狭まるかもしれないし、その逆の反応が惹起されるかもしれない、等々。

第三点目として、人がとる位置関係や距離感を土台に、どういう社会関係が築かれるかに注意を向けてみよう。「医師―患者」関係や「セラピスト―クライアント」関係は、親子関係や師弟関係と同じく、非対称的な関係にある。グレゴリー・ベイトソンは、メンバーが対等である場合には互酬性や戦闘など、正負のちがいはあるが、いずれも関係項が対称的 (symmetric) な相互作用に行き着く点に注意をうながす。対照的に、関係項が対等でない場合には一方が世話をし、他方がそれに依存するというように非対称的な〈能動―受動〉や〈命令―服従〉の軸が生まれる。邦訳では前者の関係を特徴づける互酬性 (reciprocity) を相互性と訳し、後者を特徴づける相補的

(complementary)な関係とのちがいが強調されていた。⁽¹⁰⁾ 相補型の関係の場合、上位者の能動に対して下位者は受動的な位置に移る、——下位者は上位者の親切や厚意に対して受益者になる一方、上位者の命令にしたがい、その権威に従属する。上位者は教え、下位者は学び、上位者は下位者の名前を呼び、下位者は上位者に返事をする。この患者が性的な話題を口にするのに、おそらく精神分析の知識は必須ではない。精神分析を知らなくとも、医師たちが浴する性の文化的なコードに自分も浴していれば、それで十分だった。実際、精神分析がキリスト教道徳を参照していたのは、フロイトが建前としてのやや腐りかけたキリスト教道徳と、その裂け目から噴き出す本音としての文化的退廃との二重性、つまりハプスブルク家の面々に代表される取り澄ました態度と赤裸々な欲や野心との二重性が隠しきれなくなった時代の空気を吸いながら、精神分析の体系を築いていたことから明白である。彼の築いた露骨な心理学が一九世紀末ウィーンの支配者階級の生活の痛点を刺激するものだったのと同様、我々が検討している患者の発言もまた二〇世紀アメリカに暮らす医師たちの文化的・道徳的な痛点を突くものだったのだ。それゆえ相手が医師であれ、神父や牧師であれ、問題の本質は変わらない、——彼らはみな、関係の非対称性（相補型の対人関係）を自明の前提としていたからだ。それゆえ、医師は患者がなにかを隠そうとすれば秘密を聞き出そうとしただろうし、患者の側も最初こそ抵抗の姿勢を見せるが徐々に心を開き、目の前の専門家に胸の内を明かすだろう。もちろん、通常の関係の構図ならそうなるところだが、この患者の場合はややちがっていた。医師の質問に答えてそう言うはずの答えを、聞かれもしないのに自ら発し、医師が提示する解釈に患者が頷いて述べるはずの内容をみずから勝手に喋りはじめていた。まるで設問が出題される前に「はい、はい」と大声をあげながら挙手する出しゃばりな小学生のように――。

医師たちにしてみれば、患者が解答をたずさえて診察室を訪れたわけだから、こんなにわかりやすい患者はいないと感じられただろう。「くしゃみ」についても、性的な問題に起因する心の病氣（しこり）を患っていると考えれば、その種の患者に特有の発作として解釈できる。似たような場面に差し掛かると計ったように正確に繰り返される発作であってみれば、なおさらのことである。「くしゃみ」の女性患者は、精神科医、つまりエリクソンのもとに送られるまで奇妙な駆け引きを延々とつづけるクセのある患者と解釈され、またそう解釈されそうな患者を演じつづけた。そのエリクソンにしても、あらゆる予断を排して接することができなければ、やはり他の医師たちと同じあやまちを繰り返していたかもしれない。精神科というだけで診察室のドアを叩く患者はみな心に問題を抱えているとの予断をもつて接すれば、器質的な疾患を見逃してしまった可能性が高い。他の科から回された患者となれば、なおさらである。また、患者が精神分析ないしキリスト教の文脈をいつわりの枠組みとして利用する以上、それらを排しえなかったなら、患者の行動パターンをいつわりの枠組みから切り離して、行動のつながりをそれ自体として検討することはできなかっただろう。もしも偽装の裏地に縫いつけられた行動の論理をつかめなければ、胸の内部を漸進的に冒してゆく病氣にも決して気づくことはできなかった。

この患者は〈医師―患者〉関係の裏地に、本人すら自覚することなく対称型の関係を滑りこませていた。医師たちは気付かなかったが、〈治療者―患者〉の内側に縫いつけられていたのは対等な者同士のゲームであり、駆け引き、つまり騙しあいであり、面接のふりをした勝負だった。

エリクソンは患者がいる面接室で知人の婦人科医に電話し、彼女に「ある心理学的徴候がある」旨を伝え、その伝言の内容が彼女の耳にとどくよう演出した。彼があえて命じるのではなく、「私が電話で彼に言うことを聞

いてもいいですよ」と許可したのは、もしも命令であれば逆らうことができるが、許可された権利をむざむざ放棄すれば不利益しか生じないからである。エリクソンは許可という形でその場に彼女をとどめ置き、挑戦を受け立つ場から一步も動かず、対等なゲームを継続していた。彼は患者が医師の無防備さにつけこんで策を弄する挑戦者であることを伝え、注意をうながした。今後もしも駆け引きがつづく可能性を受話器の向こうに伝え、その会話に彼女を巻きこむことにより、彼女が再び仕掛けるかもしれない挑戦を前もって封じた恰好になる。診察の手順から入院、手術に至るまで逐一指示し、そのすべてが彼女の耳に届くようにしたのは、決められた手順の体系で彼女を包囲し、逃れられないようにするためだ。そのことを対称型のゲームが幕を閉じようとする「アー」において知らしめなければならなかった。

エリクソンの臨床にベイトソンのモデルを応用したのは、もちろん彼らが親しかったからではない。もとより精神医学や心理学では対人関係の複数性に着目したものが少なくない。たとえば、交流分析は、対人的行為における自我の構えに着目し、人は子に対する「親」や親に対する「子」の役割を演じようとするし、また対等な「大人」であろうとしたりする。「親」「子」「大人」という三つ組の位相は、ベイトソンの相補型と対称型それぞれの関係項の特徴をそなえている。実際、交流分析により、対等な大人の関係に甘えん坊の「ぼく」や「あたし」が混入するケースや、親子関係や師弟関係に対等な間柄を性急に求めるあまりに混乱をきたすケースなど、自我の構えを起点に関係の階層構造を考察し、対人関係の病理を解剖学的にあつかうことが可能になった¹⁾。

しかし、交流分析は自我の構えを三つに絞ったがゆえに、ベイトソンが形式化した関係の型に比して、抽象度

が低く、それだけ演繹力に乏しい。対人関係の力学的な錯綜をその多重性のままに見据えようとすれば、行き着くところはH・S・サリヴァンの精神医学になる。彼は「今——ここ」における〈医師——患者〉関係に病んだ過去の関係パターンが流入し、進行中の相互作用のコードを奪取し、いつしか主旋律を奏でるようになる局面を明らかにした。悲しくも悩ましい関係性がいくつも併存し、本来は時制が異なるはずの関係が同時に絡みあうと、時を隔てた関係が「今」の一点で重なり合い、さながら地獄めいた錯綜を呈する。それをサリヴァンはパラタクシスの対人関係と呼んでいた。⁽¹²⁾サリヴァンの精神医学は、精神分析における層構造に着想を得ながらも、因果論的に過去に遡行するのではなく、進行中の問題に過去が絡みつき、主役の座を奪い、事態を複雑にしてゆくさまに着目した点で、今なおバイオニア的な輝きを放っている。その影響は交流分析はもちろん、フロム＝ライヒマンを通じてベイトソンのグループにも合流し、その流れを汲んでエリクソン派のセラピストにも影響を及ぼすこととなった。しかし、サリヴァンの錯綜した議論は、なるほど学ぶべき点は今もつて多いものの、モデル化以前の抽象的な錯綜そのものであり、現実のスケッチとしては非常に興味深いが、エリクソンの潔い処方分析する用途には適していない。

私たちがエリクソンの事例を分析するのの際して、ベイトソンの関係構造の分析が最適だと判断したのは、交流分析が単純に過ぎ、サリヴァンが複雑に過ぎると考えたからではない。いずれの枠組みにおいても〈医師——患者〉の関係パターンに国家間の軍拡競争やボクシングのタイトルマッチが滑りこんでゆく余地はない、——「くしゃみ」の患者が二六回におよぶタイトル戦を制してきたタフなチャンピオンだったことを忘れないようにしよう。ベイトソンのモデルは、交流分析のように自我の構えのヴァリエーションから出発するのではなく、対人関

係の構造を分類・形式化することから出発している。関係の重層化のダイナミズムを心理学ではなく、人類学や生物学の視点から組み立てたことで、未開社会における子どものごっこ遊びや野生動物のあま囁み行動の含意についても鋭い分析が可能になった。相互作用の水準が重層化し、そこに言語的なメッセージの水準が幾重にも挟み込まれていくとき、観察の範囲と分析の幅はさらに広がり、偉大なダブル・バインド理論へと結実することになる。ダブル・バインドがエリクソンの治療技法から採られたことが疑いのない事実だとしても、ベイトソンによる形式化もまた、やはり彼以外の誰にもなしえなかった偉業であることは疑いを容れない。

さて、ローゼンは右の事例を引いた後で、実にシンプルにコメントしていた。「患者は隠そうとしている不安を漏らす。ここでエリクソンはセラピストたちに、私たちが目にするものの観察だけでなく、患者が隠そうとしているものを探そうに言っている。彼が指摘しているように、患者はしばしば、隠そうとしていることから注意をそらそうとして、間接的にそれらのことを漏らしている」¹³。もう少し言うなら、患者は通常ならば隠そうとするものをあえて明かすことによって〈医師―患者〉関係の裏地に全く別の関係を滑りこませた。ちょうど手品師がするように、露骨に仕掛けた罠がきらめかす明るみに視線を誘導し、その陰に彼女は何か別のものを隠していた。隠されたものが明かされずに終われば、彼女は勝利を収め、いつものように「ご機嫌」になるが、引き換えに人生から別れを告げなければならなくなる。もしも医師が対等な者同士の賭け（勝負）に勘づいたなら、勝負師となった彼は次の点にも気づかなければならない。すなわち、発作にみえる異常行動（くしゃみ）が現われるのは、医師の注意が左胸に向けられたときではなく、また、おなかに向けられたときでもなく、なぜ、かなら

ず右胸に焦点化されたときでなければいけなかったのか。もしも、それがこの患者に特有のヒステリー発作ではなく、いわんや心の奥に隠された意味の表現でもないとしたら、それはいったい何なのか、そして、この一連の策略にはいかなる目的が託され、どんな動機にもとづいているのか？

エリクソンの観察眼はおそらく、これら一群の問いを經由することにより、肉眼ではなく、論理的なソナーを用いて体内に巣くう病巣を探り当てたのだ。彼は患者が仕掛けたゲームの一手に気づいて、挑戦を受け、そして勝利した。一つの勝利を他の医師の勝利に引き継ぎ、今度は医師の側の連戦連勝のプロセスにつなげるまで、彼は対等な立場にとどまった。手術の成功にいたるスケジュールを語り終え、受話器を置いたとき、エリクソンはおそらく対称型の関係に幕を下ろして相補型の関係に切り替え、一患者となった女性にようやく医師として今後の予定を伝えたにちがいない。

たぶん私たちは魔法使いの言葉が、魔法によって組み立てられているのではないことを理解できたのではなからうか。それは彼の奇跡のような事例に目をみはることで終わるのではなく、ごく短い言葉で説明された事例に對して、無数の接線を引くことでようやく捉えられる無数の秘密があり、それらを一つ一つ解きほぐすことにより作戦の全貌がやっと見えてくるからである。私たちは、そのような遅々とした歩みから全貌をつかもうとする態度を、とりあえず経験論的と形容しておくことにしよう。

三 無意識、催眠、未来の知

さて、私たちの赴く先が経験論にとどまらず、ハイパー経験論と呼ばなければならないのは、通常の経験を是るかに超えた領域に観察の領野を広げ、洞察の矢を投げなければならないからである。

その領野は一般に無意識と呼ばれる。フロイトとほぼ同時期に無意識の存在に気付いた人物に、ピエール・ジャネというフランス人医師がいた。とはいえ彼とフロイトとの同時性には偶発的なものもなければ取り立てて因縁めいたものもない。いずれも催眠術で名高い神経学者、シャルコーに師事し、意識の気づきや理性の制御のおよばない何かが存在することを目のあたりにしていた。フロイトはシャルコーに師事したものの、コカイン研究の大失敗につづいて、今回は催眠の才能に恵まれていないという事実を突きつけられ、途方に暮れていた。彼がその道をあきらめ、かろうじて得手だったタロット占いに光明を見いだしたその先に待っていたのが自由連想法だった。フロイトはかなり早い段階から催眠の治療効果に懐疑的だったが、それは彼自身が不得手だったからではなく、シャルコーのような名手による実演でも、患者の強い抵抗を目の当たりにする機会が多かったからである。患者を治すためには強力な抵抗を解除する方法をなんとかして見つけなければならず。そうでなければ無意識の深部にアクセスできそうになかった。

ジャネの探索は、フロイトのようにアンチ・シャルコーの道を進むのではなく、むしろシャルコーに端を発する意識下の探究を発展的に継承していった。彼は独自に催眠実験を継続し、催眠から覚めた後に効果をあらわす後催眠暗示という概念を提示したばかりか、さらには催眠状態における自動書記の実験なども積極的に行なつて

いった。カタルシスの概念についても、精神分析では「昇華」と訳されるように、いわば鬱憤が解消されてスッキリする（もしくは症状が消失する）ことを意味するが、催眠実験の場合には化学における触媒反応の含意を受け継いでいた。たとえば、催眠暗示における治療者の言葉は、反応をうながすキューとして機能するが、反応それ自体はもっぱら患者が元々もっていた素材だけで行なわれる。後催眠暗示にいたっては、治療者の姿もなく、余韻としてキュー機能が患者本人に受け渡され、結果的に患者ひとりですべてが執り行なわれる。触媒は治療者の手をはなれ、もはや標識の役割しか果たしていないが、その役目の希薄さは暗示の強度とはなんの関係もない。このように考えると、シャルコーからジャネに受け継がれた道は、サリヴァンやアンリ・エーの力動精神医学に引き継がれるだけでなく、エリクソンの基本スタンスに通じる部分がある。というのも、エリクソンも治療者の役割を触媒のようなものと見なし、患者がみずからのもてる資源を使って問題を解決するプロセスを重視し、治療者はそのかたわらからそっと手を貸すだけだと考えていたからである。

以下に引く事例は、語られた内容をよくよく考えると驚愕すべき事実に満ちているが、エリクソン自身はほとんど何もしていないという点でも象徴的な意味をもつ。ジャネがサルペトリエール病院を辞するまで繰り返し実験した自動書記（以下の引用における訳語は「自動書字」が採られている）の実験を、この事例ではエリクソンが行なっている。

昔、ミシガン州立大学で、アンダーソン博士が心理学科全員を対象に催眠の講義をおこないました。アンダーソン博士は、私に実演をしたくないかと尋ねました。私は、被験者がいないのでボランティアがいるとよいのですが、と

答えました。多数の学生が集められ、ボランテアになってみたいか、きかれました。多くの学生が志願しました。私は、ベギーという名の女子学生を選びました。アンダーソン博士ががっていたことの一つに自動書字がありました。私は、ベギーを長い机の端に行かせ、私たちは反対の端に行きました。

私はベギーをトランスに入れました。彼女は、私たちが長いテーブルの反対の端にいることはわかっていました。彼女は、何かを無意識のうちに書きました。そして彼女は、無意識のうちに書いた紙を折り、さらにもう一度折って、無意識のうちに自分のハンドバッグに入れました。彼女は、この行為にまったく気づいていませんでした。彼女以外は全員わかりました。私は彼女を再びトランスに入れ「覚醒した後で、あなたは『六月の美しい日です』と無意識のうちに書くでしょう」と言いました。その日は四月でした。

彼女はそれとおりに書きましたが、私が彼女にそれを示したところ、彼女は自分は書いていないし、それは自分の筆跡ではないと言いました。確かに彼女の筆跡ではありませんでした。

九月になり、彼女がインディアナ州から長距離電話をかけてきました。「今日、おもしろいことがありました。先生が関係していると思いますのでお話しします。今日ハンドバッグの中身を整理していたら、丸まった紙が出てきました。広げて見ると、見覚えのない筆跡で「私はハロルドと結婚するのかしら?」と書いてあったんです。私の筆跡ではありません。この紙がどうして私のハンドバッグの中に入っていたのかわかりません。ただ、先生が関係しているような気がしたのです。私が先生にお会いしたのは、四月にミシガン州立大学で先生の授業を受けたときだけです。この紙のことを説明してくださいませんか?」

私は言いました。「四月に講義をしたのは事実です。ところで、あなたはあのころ誰かと婚約していましたか?」

「えー、そうです。ビルと婚約していました」

私は言いました。「そのとき、その婚約に何の疑いもなかったのですか？」

「えー、ありませんでした」

「ビルとの婚約に疑問を感じるようになりましたか？」

「はい、この六月にビルとは別れました」

「それから？」

「七月にハロルドと結婚しました」

「ハロルドのことはどれくらい前から知っていたのですか？」

「顔は前から知っていました。二学期になってからだと思います。でも会って、話したことはありませんでした。

七月に偶然彼と知り合うまでは」

私は言いました。「『私はハロルドと結婚するのかしら』というのは、あなたが無意識のうちに、トランス状態で書いたものです。あなたの無意識は、すでにビルとは別れることになるということ、そして本当に自分が好きな男性はハロルドであるということを知っていたのです」。彼女の無意識は、何カ月も前に婚約が破談になるのを知っていました。彼女が紙をたたんでしまったのは、まだ四月の段階では、意識してその事実に向面することができなかったのです。⁽¹⁴⁾

この幸せそうな事例が私たちに問いかけるのは、あまり穏やかではない問題である。すなわち、無意識という

知られざる領域には、いったい何がひそんでいるのか？

エリクソンが行なったのはペギーという、なんら問題を抱えていない女子大生を被験者に催眠状態で自動書記の実験を試みたという、それだけのことである。自動書記は二度にわたって行なわれた。一度目の実験では何かが書き留められたが、素早く折りたたまれ、ハンドバッグにしまわれたため、何が書かれたのか誰にも知られることがなかった。知っていたのはペギーの意識下で文章をものした隠れたる主体のみである。二度目はエリクソンが文章を指定し、「六月の美しい日です」と書かせている。実験者が指定した文章なので、隠す必要もないから、あとで検討するように無意識の主体の筆跡がそのまま刻印されていた。

我々が真つ先に取りられるのは、一度目の実験において、無意識の意向ないし判断によって固く折り畳まれ、バッグにしまわれたメッセージである。それはまちがいになくトランス状態のペギーが書いたものだが、書いた主体がペギーその人なのかと問われると、やや心許ない。何が書かれていたのか、ペギー自身の記憶にもなかったからだ。書かれた内容だけでなく、自分で書いた紙を折りたたみ、バッグにしまうという一連の動作のどれ一つとして記憶に痕跡を残さなかった。他の参加者もその様子を見てただけで、バッグの中身を詮索することもなかった。ペギー本人の意図が関与していない挙動でありながら、意識下の何者かの意向を尊重したことになる。ブライパシーといえるのか否かもわからない秘密を尊重したことになり、この点は十分に注目されてよい。

最初の文章を検討する前に、二つ目の文章に目を向けてみよう。「六月の美しい日」には何の意味もない。ただ、六月は結婚のシーズンだから、恋愛や婚姻に相応に関心があれば、それに関係するメッセージを受け取ることは可能だろう。しかし、その一言から被験者が何を受け取るかは彼女自身にまかされていて、エリクソンは与り知

らないし、なんら予測していなかったはずだ。その意味でもエリクソンは何もしていない。だが、何かがもし起こるなら、その何かわからないものの種子だけは蒔かれていた。それが種子であることが判明するのは、何かが開花してからのことであり、何も開花しなければそれが種子でなかったか、もしくは萌えることのない死せる種子だったことになる。

では、実験のあと、ペギーの身に起きたことを順番に整理しておこう。

自動書記の実験が行なわれたのは四月だった。

トランス状態のペギー（の無意識）は一度目の実験で、紙に「私はハロルドと結婚するのかしら（Will I marry Harold?）」と書くと、それをそそくさと折りたたんでハンドバッグにしまった。

四月の時点で、ペギーにはビルという婚約者がいた。このとき、ハロルドの顔は知っていたが、まだ言葉を交わしたこともなかった。

「六月の素晴らしい日」にペギーはどのような事情があつてかは不明だが、ビルとの婚約を解消した。もちろん婚約解消の理由はハロルドではない。ペギーとハロルドはまだ知己でもなかったからだ。

七月、ペギーはハロルドと知り合いになったが、その件について彼女は「偶然彼と知り合う」と表現している。何より驚かされるのは、四月の時点でペギー（の無意識）が、やがて七月になれば「偶然」に知り合う男性に言及しているばかりか、彼との結婚にまで言及していた点にある。このことは、無意識が数カ月後の偶然の出会いを予知していたか、もしくは、ペギーには偶然と解釈されている出会いが実は偶然でもなんでもなかったことを意味する。もしも紙に書かれた文が予言でないとなれば、答えは一つだ。出会いが「偶然」と映ったのは、ペ

ギーの意識が受けた印象でしかなく、四月のペギーの無意識にとつては偶然ではなく、たとえ運命ではないにしても少なくとも蓋然であるか、ひいては必然だったことになる。

もう一つ気になるのは、四月の段階で婚約中のビルにはなんら言及がない点だ。七月の破談は四月の段階で折りこみ済みだったと考えなければならないが、ペギーはそのことを知らなかった。

無意識の人格が知っていることを、意識レベルの人格がまったく知らないということがあるのだろうか。もちろん、この段階で私が使っている「人格」の用語は多重人格のそれを意味しない。なんら問題を抱えていない、ごく健康的な人物でありながら、意識と無意識という二つの領域に、それぞれの人格があつて、一方が他方について全く知らないということを、どう理解すればよいのだろう。

ヒントは筆跡のちがいにありそうだ。バッグの奥から取り出した紙を見たが、ペギーには書いた覚えがなく、しかも筆跡が自分のものとは異なると主張していた。二度目の自動書記の筆跡はエリクソンをはじめ、実験の参加者たちも見て確認しているから、ペギーの筆跡でないことについては疑いの余地がなかった。

意識の主体であるペギーの書体と、無意識に住まう何者かの書体とがまったく異なっていて、その点が彼女にのみならず、他の誰の目にも明白であるとき、文章の主語である「私(I)」と等号で結ばれるべき行為の主体について、どのように考えるのが妥当であろうか。文章の主語と行為の主体とを一対一対応させる操作が正当だとしたら、文の主語はその文を書くという行為の主体を指すはずであるが、指示の先にあるのはペギーではなく、彼女の内にあって、しかも彼女の意識から独立したもう一つの人格であることになる。繰り返すが、それをジャネが無意識の主体を仮託した、多重人格における別人格と一緒にくたにしてはならない。それは無意識という闇の

領域に遺棄された何かが、次第に人格をもつようになった帰結ではないし、心の奥深くに隠されるに足る何らかの道理がある人格でもなく、ことの始めから意識下の領分をあずかる者として、そこにあったかのような人格である。その、いわば無意識の主人は、ペギーの未熟な意識をまるで親が慈しむように観察し、時空の高みから気掛かりな幼子の行く末を見守るかにように、あえて真実を伏せたことになる。

しかしながら、そのような特徴をそなえた無意識は、フロイトが考えた無意識とは似ても似つかない。フロイトが想定していた無意識は、一つには意識に受け入れたい経験の数々、つまり抑圧されたものを構成し、もう一つは意識やその検閲者にとって、自分のものとして引き受けられない欲望とその源泉である。イメージとしては、どちらにしても意識下にうごめく無意識のマグマであり、意識を威嚇し、主体を脅かし、自我を危機に陥れようとする危なっかしい存在だ。これはこれでありそうな話だし、十分に納得のゆく考えだ。たとえば、生活指導の教員が家庭でも厳格な教師の顔を崩さず、我が子にも細かい生活指導を徹底すれば、意識の領分は狭小な小部屋に限られ、自我が身の丈よりもはるかに小さく縮こまる一方、無意識の衝動はマグマのように膨れ上がり、暴発寸前の状態になるだろう。その暴発が他者に向けられるか自身に向けられるかは別にしても――。

フロイトの無意識モデルとは別に、もう一つ納得のゆくモデルを紹介しておこう。フランスの哲学者、アンリ・ベルクソンは知性の習熟の度合いが高まるにつれ、人の行動は無意識的になってゆくと考えた。自転車や自動車を初心者として運転するときは、手足の動きすべてに神経を集中させ、一つ一つの動きに細心の注意を払うものだ。料理の初心者がまな板の上で野菜や肉を切るときも、包丁をもつ手と素材を押さえる手に細心の注意を払い、ゆっくり、確実に材料を切断してゆく。運転や調理に習熟してゆくと、注意は自分の手足を離れ、まわりの景色

や道路の交通状況、まな板の上にある素材の固さや厚みなど、別の特徴へと移ってゆく。さらに運転や調理の技術が上達してゆくと、へたに手足に意識的な注意を向けたりすると、かえってスムーズなハンドルさばきや包丁さばきのさまたげになる。初心者のときに意識的に習得した技術が習熟の度合いによって無意識となり、自動的に再生される技術になると、その技術を修正するとき、もしくは見直すときをのぞけば、意識することがほとんどなくなってゆく。このような無意識化の過程を概念化してゆくことは実のところ、私たちにとって納得の行くものであると同時に、ベルクソンのきわめてユニークな時間と記憶の理論に合致したものである。

ベルクソンの時間論のキー概念は「持続」であり、過去の全体を表わしている。現在は「今」という希薄な一点で過去の全体に触れている。有名な図では、過去が円錐で表わされ、その鋭利な頂点が現在を表わす平面の一点に触れている。無意識に沈澱した技術の全体は私たちの過去（＝記憶）であり、クルマを運転するとき、夕食を作るとき、それぞれの技術は記憶から呼び出され、現在の一点においてクルマを目的地に向かって走らせ、家族のための夕食をテーブルに並べるために用いられる⁽¹⁵⁾。

私たちにとって、ベルクソンの無意識は馴染みやすく、日頃の経験により、すでに十分に裏付けられているように感じられる。しかし、その無意識の概念から、エリクソンがペギーの実験で出会ったようなもう一つの「人格」のようなものの出現は期待できそうにない。

他方、フロイトの無意識に別人格のような何かを求めることは十分に可能だが、どうにも信用できる人格にはなってくれそうにない。獐猛で邪悪な印象をぬぐえないのだ。この点はジャネの別人格についても同様である。

ユングの無意識には、エリクソンが実験で出会った人格に近いものが想定されているのだが、今は深入りする

のは控え、最低限の言及にとどめよう。ユングの元型のなかに老賢者という、経験と智慧の象徴があるが、エリクソン派の人々には、老賢者のイメージが収束するのはむしろエリクソンその人であったように思われる。また、共著を含むエリクソンの著作のなかで、最重要な共著者であり編纂者であるアーネスト・ロッシが、エリクソンのもとを訪れる前にユング派のセラピストだったことは、控えておくべき情報ではないかもしれない。ユング心理学の大伽藍は、なぜか理論的な構築物がなにもないエリクソンの方法と意外に相性がよいのかもしれない。

トランス状態のペギーが「私（I）」と記し、その筆跡がペギーのものではなく、その主語を記した記憶が彼女にない以上、無意識という不可知の領域に、主体に相当する何者かが存在していたことになる。ペギーの意識は何も知らなかったが、無意識の主体には、ハロルドと知り合いになることもスケジュールに書きこまれていて、そこに偶然が紛れこむ余地は微塵もなかった。ペギーが「偶然」と感じた出来事は、事前に決定済みの案件だったのだ。しかも単なる知己にとどまらず、親密な間柄になることも無意識にはわかっていた。もちろん独りよがりの自惚れではなく、記された一文にとって折りこみ済みの条件になっていた。さもないければ、無意識の関心が「ハロルドと結婚するのかしら」という疑問に収斂することはないからだ。

したがって、ペギーの無意識が書いた一文は、ある可能性に思いを馳せたものではないことになる。ハロルドとの婚姻だけが蓋然的なのであって、それに付随する四月以降の事柄は、なにもかも必然として処理されているかのようだ。もちろん、分かりきったこと、つまり必然に属する事柄にはビルとの関係も含まれていた。ビルは実験が行われた四月段階ではペギーの意識にとって大切な婚約者だったはずだが、無意識にとって彼との破談は変更したい予定であり、放っておいても問もなく片づく案件にすぎなかった。

繰り返すことになるが、無意識の知について、真に驚くべき点は、書かれた一事に関する蓋然性をのぞいて、他の出来事は、それらがもしも実現しなかったら、気掛かりな一事が蓋然的ですらなくなるという点において、はじめからすべてが必然だったことになる。

さらに驚くべき点を一つ検討しておかなければならない。ペギーの無意識は、わざわざ記した一文を、ペギー自身には知られないように細工した。その理由はどこにあるのか。エリクソンはペギーに「まだ四月の段階では、意識してその事実直面することができなかったのです」と解説していた。

エリクソンの言うとおりかもしれない。とはいえ、エリクソンにしても七月を過ぎ、九月に身を置いているからこそ言えたのだろうか……。四月ではどうだろうか？ ビルという婚約者がいながら、まだ知り合ってもいないハロルドとの婚姻を告げる文章など、さすがに出し抜けの印象を拭えないし、何より当人にとっても信じがたいだろう。だから、あえて伏せておくという、いわば親心に近い判断となったわけだが、少しでも考えれば親でも思いつかない判断であることが明白だろう。なにしろ無意識は、意識の知らない未来に通じ、知りえた事実が現時のペギーには受け入れがたいから、あえて知らせなかったというのだから。さらには、メッセージの内容があまりに謎めいていて、しかし強い意味をもつため、もし知られてしまったら未来に影響をおよぼし、無意識には必然と映る事象の系列に不測の変動を来しかねないがゆえに、あえて意識の主体には知らせないという判断をしたのかもしれない。エリクソンの助言がほのめかしているのもその点である。

以上の点を考慮すると、無意識とは、かくも多くを知り、かくも的確に判断し、そしてあれほどまでに理解を超えた仕事をやすやすとしてのけるものであったということになる。私たちの無意識もまたペギーのそれと同様、

かくも的確に未来を見通す力にめぐまれているのだろうか……。もしも未来の知という表現が「予知」や「予言」といった神秘的な響きを連想させるなら、知られざる蓋然性に関する知と言ってもいい。芽吹く前に開花のさまを見通し、見えざる因果の複雑な網目模様を見わたしながら、なお的確に判断し、さらには意識や自我に対しても透徹した分析力をそなえているとして、それらの特徴をすべて具えた無意識のモデルがどこかにあるだろうか。エリクソンはないと思っているようだし、モデル化の必要性も感じていないようだ。無意識になしうることを数え上げようとすれば、これまで無意識がやってのけたことすべてを網羅しなければならぬ。それは脳になしうることすべてを列挙するのに似て、際限がなく、また虚しい仕事になるだろう。

おそらく、無意識のモデルとして、もつともすぐれたものはない。ただし、それはすぐれたものがないという意味ではない。フロイトのモデルもユングのモデルも、そしてベルクソンのモデルもすぐれているし、それらのどれもが人の心の中にあつて、しかも一人のなかに共存しているかもしれない。問題は、これまで構築されたモデルを全部、鍋に入れて煮こんでも、なお説明のつかない事例がいくらかでも出てくるということである。エリクソンが無意識のモデル化にまったく関心を示さなかったのは、そのためだろう。

したがって、無意識には、それがなしえた仕事から類推できる仕組みやモデルは存在しないと言わなければならない。仕組みやモデルは、経験の多さに対する不足を露呈し、揺るぎない現実に対しても常にまちがいの元となる脅威にさらされている。ならば、いつそモデル化の企ては放棄して、力もしくは諸力の合成だけを考えればよい。無意識には、それがなしえたすべての仕事に対して、その原因となる力を措定するか、有限な力の組み合わせを考えるだけでよい。

そして、「自動書字」の事例が教えてくれたように、人が用いる言葉には、心の深奥にひそむ力にはたらきかけることができる。催眠はその効果的な手段の一つだ。催眠というと、多くの人は言葉を命令とみなし、しかも単純かつ機械的な命令とみなしがちである。被験者の反応についても言葉の命じるままになり、いわば誘導の言葉を被験者は行動でなぞり、単調に反復するだけだと考えがちだろう。しかし「自動書字」の事例からも明らかに、催眠者の指示に対して、ペギーの無意識が採った行為は「書く」という一点で結びついてはいるものの、全体としては実験の主旨から大きく逸脱していた。その逸脱した部分において、ペギーの無意識は実験者の意図を超えて、ペギー自身のためにはたらく守護者の印象を残している。催眠は被験者を意のままに操るのではなく、被験者が暗示の言葉をキューとして利用しながら、自分のために何ごとかをこなすのである。当人が巧みにその機会を利用しさえできれば、無意識が何を成し遂げたのかを治療者が知る必要はないし、ときには当人ですらあえて知る必要はないのである。

註

- (1) 今にして思えば、ユングがシンクロニシティを提唱した本の共著者が量子力学における排他原理を提唱したヴォルフガング・パウリであることに小さな興奮を覚えないではいけないが、やや残念なことに、パウリ論文はケプラーの楕円軌道の発見に元型的イメーজが果たした役割を論じたものであり、量子力学の見地からシンクロニシティの信憑性を考察するものではなかった。C・G・ユング、W・パウリ『自然現象と心の構造』河合隼雄・村上陽一郎訳、海鳴社、一九七六年。
- (2) シドニー・ローゼン編『私の声はあなたとともに』中野善行・青木省三訳、二瓶社、一九九六年。四五頁。
- (3) ジェイ・ヘイリー編『ミルトン・エリクソン 子どもと家族を語る』森俊夫訳、金剛出版、二〇〇一年。一七三頁。

- (4) 同、一七一一二頁。
- (5) ウィリアム・ハドソン・オハンロン『ミルトン・エリクソン入門』森俊夫・菊池安希子訳、金剛出版、一九九五年。二六頁。
- (6) ジェフリー・K・ザイク『ミルトン・エリクソンの心理療法セミナー』成瀬悟策監訳、宮田敬一訳、星和書店、一九八四年。三三五―六頁。
- (7) ダン・ショート、ベティ・アリス・エリクソン、ロキサンナ・エリクソン＝クライン『ミルトン・エリクソン心理療法』(ヘレジリエンス)を育てる』浅田仁子訳、春秋社、二〇一四年。五一―六頁。
- (8) ミシェル・フーコー『狂気の歴史』田村俣訳、新潮社、一九七五年。三四二―三頁。
- (9) ローゼン、二〇二頁。この事例では、なんとか間に合って患者の命が救われているが、他の事例では間に合わず、悲しい最期につながったものもある。後者の例を簡単に紹介しよう。ある女性が少なくとも二人以上の医師のあいだをたらい回しにされ、ヒステリーと診断されてエリクソンの元に送られてきた。いくつかの質疑を通じてエリクソンは女性の症状がヒステリー性のものでありえないと判断し、おそらく脳炎ではないかと推測し、彼のもとに送った医師に送り返した。その医師が催眠によって痛みをなくしても、すぐに痛みがぶり返してくるのを確認した翌日にその患者は亡くなったという。Edited by Ernest L. Rossi and Margaret O. Ryan, "Mind-Body Communication in Hypnosis: The Seminars, Workshops, and Lectures of Milton H. Erickson, vol III", Irvington Publisher, INC, 1986, pp.102-4.
- (10) グレゴリー・ベイトソン『精神の生態学』下巻、佐藤良明・高橋和久訳、思索社、一九八七年。四六二―七頁。
- (11) 交流分析の入門書としては、エリック・バーン『人生ゲーム入門——人間関係の心理学』南博訳、河出書房新社、一九八九年。
- (12) H・S・サリヴァン『現代精神医学の概念』中井久夫・山口隆訳、みすず書房、一九七六年。一一二―三頁。
- (13) ローゼン、二〇三頁。
- (14) ローゼン、六九―七一頁。
- (15) ベルクソン『創造的進化』真方敬道訳、岩波文庫、一九七九年。一七六―七頁。ベルクソンの無意識は『物質と記憶』でも論じられているが、むしろ我々の議論には『創造的進化』における知性と本能との対立図式において、本能に負われるやや重すぎる荷の総体を無意識と見做して考えると、彼の論の道筋がより見やすくなり、その現代性にもつながると思われる。エラン・ヴィタルが重力に逆らって上昇することなく、慣性化した知性となり、慣性の法則にしたがう物質のようにふるまうと

ミルトン・H・エリクソンとハイパー経験論の基礎

ミルトン・H・エリクソンとハイパー経験論の基礎

き、それをベルクソンは本能と呼ぶが、その総体は無意識とみなせば、知性と本能との動的な対関係を、つい我々が陥りがちな先天的と後天的との区別にとらわれずに考察することができだろう。